

みなさん、おはようございます。ヘーゲルは人間のことを自己意識と呼んで、「自己意識は自己意識に対してのみ自己意識である」つまり「人間は人間に対してのみ人間である」と言います。これは相互承認の問題で、人間はお互いに存在を認め合うことによって自分である、人間であるということです。このことは動かないと思います。

(職員朝礼後、このことがわかりにくいという先生がいらっしゃったのでちょっと振り返っておきます。自分だけでは自分は成り立ちません。すべてが自分だったら自分という概念すら成り立たないでしょう。だから自分が成立するためには他者が必要です。しかし他者といってもその中に「人間」がいなければ、自分のことを人間と認識することは出来ないでしょう。人間は相手の内に自分と同じ人間を認めることによって、自分の内に相手と同じ人間を認めることによってのみ「人間」になり得るのです。)

他方で人間は自己存在に不安を抱えているために自己存在に関心を抱かざるを得ない。自己中心的にならざるを得ない。これが原罪です。先の相互承認とこの原罪とが矛盾している、それが人間存在です。

人間は原罪を負っています。それに基づいて人間は罪を犯します。罪を犯さない人間はいません。犯した罪を告白する、つまり「ごめんなさい」と言う。それを「赦す」。こうして人間関係が再構築されることになりますが、根本的なところで罪とその赦しが成り立つのか、それがヘーゲルの考えた問題です。これは道徳と宗教の問題でもあります。

みなさん、どう思われますか。罪と赦しが根本的なところで成り立つと思う人？成り立たない、無理だと思う人？難しいですね。続きはまた今度。本日もよろしくお願いいたします。